

ローマの信徒への手紙：学びの手引き

キリストにある神の憐れみは、信仰、帰属、日々の生活をどう変えますか。

ローマの信徒への手紙は、イエス・キリストによる神の救いの義を説明し、ユダヤ人と異邦人の信徒に、その光の中で共に生きるよう求めます。パウロは人類の必要、信仰による義認、霊に導かれる生活、イスラエルへの神の真実、実践的な愛をたどります。全体の流れを読みましょう。この神学的論証は、互いを迎え、福音の宣教に加わる共同体を備えます。

背景の中で手紙を読む

パウロは、まだ訪れていないローマの信徒に語りかけます。エルサレムに援助を届けてから西へ向かう計画から、通常は第三次宣教旅行の終わりに近い紀元50年代後半に位置付けられます。コリント執筆説は有力な再構成ですが、明記された表題ではありません。パウロ自身の著作であることは広く認められています。挨拶には男女のつながりが見え、その働きも手紙の物語に属します。

聖書の参照箇所: ローマの信徒への手紙 1章1～15節・ローマの信徒への手紙 15章22節 – ローマの信徒への手紙 16章23節

出典: primary, brown

論の流れをたどる

論証は罪と裁きから、恵み、和解、新しい命へ進みます。9～11章はイスラエルへの神の約束がどう信頼できるかを問い、脱線ではなく論証に不可欠です。12～16章は憐れみを、礼拝、社会的責任、もてなし、共同の宣教へと具体化します。選びやイスラエルの将来についてキリスト者の理解は異なりますが、異邦人の思い上がりへの警告は明白です。

聖書の参照箇所: ローマの信徒への手紙 1章16～17節・ローマの信徒への手紙 8章1～39節・ローマの信徒への手紙 11章17～36節・ローマの信徒への手紙 12章1～2節

出典: primary

福音と私たちに共通する必要

ローマの信徒への手紙 1章1節 - ローマの信徒への手紙 3章20節

パウロは福音を告げ、偶像礼拝、乱れた欲望、裁く姿勢、偽善に向き合います。1章から2章まで続けて読んでください。他人を責めても、責める側が責任を免れるわけではありません。歴史的なキリスト教の性倫理は1章26～27節を同性間の性的関係を退ける箇所と理解します。一方、全体の論証はすべての人が憐れみを必要とすることを明らかにし、侮蔑を禁じます。

考えてみよう

パウロは読者の目を、他人への裁きから、神の前での自分自身の責任へどう向けますか。

恵み、信仰、アブラハム

ローマの信徒への手紙 3章21節 - ローマの信徒への手紙 4章25節

キリストによる神の救いの働きは誇りを排します。アブラハムは割礼に先立つ信仰の例となり、ユダヤ人と異邦人の双方へ議論を開きます。義認は神との正しい関係に入れられることに関わります。内面の刷新との厳密な関係ではキリスト教の伝統間に違いがありますが、救いが自己充足ではなく神の恵みによる点は共有されています。

考えてみよう

誰が神の民に属せるかという問いでアブラハムの物語が重要なのはなぜですか。パウロはどのような誇りを退けますか。

和解と霊に導かれる命

ローマの信徒への手紙 5章1節 - ローマの信徒への手紙 8章39節

神との平和から、アダムとキリストの比較、洗礼を通してキリストにあずかること、罪との戦い、命を与える霊の働きへ進みます。律法についてのパウロの議論は、悪を善にしたり聖さを任意にしたりしません。神に子として迎えらるることと復活の希望が苦しみを包みます。霊の助けは安楽な人生の約束ではありません。

考えてみよう

罪の奴隷であることと霊に導かれて生きることでは何が変わり、希望は苦しみの受け止め方をどう形づくりませんか。

神の約束とイスラエル

ローマの信徒への手紙 9章1節 - ローマの信徒への手紙 11章36節

パウロは自分の民を思って悲しみつつ、神の真実を擁護します。神の憐れみ、人間の応答、現在の不信仰を超える希望を結び付けます。選びとイスラエルに約束された救いの理解はキリスト者の間で異なります。オリーブの木の比喻は異邦人信徒の優越感を直接戒めます。この箇所をユダヤ人への敵意の正当化に用いてはいけません。

考えてみよう

オリーブの木の比喻は、異邦人信徒を支える民と約束について、何を忘れないよう求めますか。

公私の生活に表す憐れみ

ローマの信徒への手紙 12章1節 - ローマの信徒への手紙 13章14節

礼拝は、身体をもって仕えること、もてなし、敵を愛すること、責任ある市民生活へと広がります。統治者への服従を、復讐の拒否と愛の義務と併せて読みましょう。不正な支配下での限界はキリスト者の間で議論されます。13章は政府のすべての行為を善と宣言せず、統治者から道徳的責任を免除もしません。

考えてみよう

隣人への愛と復讐をしない姿勢は、責任ある社会参加をどう形づくりですか。

侮らずに迎える

ローマの信徒への手紙 14章1節 - ローマの信徒への手紙 15章13節

食べ物や日についての対立は、良心の判断が異なる信徒を迎えられるかを試します。パウロはキリストの自己献身を模範に、強い者が隣人の益のため自由を制限するよう求めます。これは意見が分かれる実践についてであり、倫理的な命令を何でも無視してよいということではありません。

考えてみよう

隣人の益のために喜ばせることと、自分の権利を言い張ることを、パウロはどこで区別していますか。

多くの人が担う福音

ローマの信徒への手紙 15章14節 – ローマの信徒への手紙 16章27節

献金、イスパニアへの計画、フェベへの推薦、挨拶は、神学が協力という形になる様子を示します。男女が支援者、協力者、苦しみを共にした人として登場します。ユニアについての表現を含め、一部の役割の詳細には議論がありますが、その存在と尊ばれた奉仕を見失ってはいけません。

考えてみよう

旅行計画と挨拶の前で読むのをやめていたら、誰の貢献を見落としていたでしょうか。

出典

- [primary] Romans; primary biblical text. Reading references only; no Bible text is reproduced in this resource. <https://ebible.org/eng-web/ROM.htm>
- [brown] Raymond E. Brown, An Introduction to the New Testament (Doubleday, 1997), chapter 24. Background and scholarly discussion; not an endorsement of every interpretation in this study.

独自に制作した本文と画像：CC BY 4.0。聖書本文と第三者の素材は対象外です。

Pauline Letters · CC BY 4.0 · <https://paulineletters.com/ja/explore/resources/study-romans>